

## アオザメ 全水域

Shortfin Mako, *Isurus oxyrinchus*

## 管理・関係機関

大西洋まぐろ類保存国際委員会 (ICCAT)  
 みなみまぐろ保存委員会 (CCSBT)  
 中西部太平洋まぐろ類委員会 (WCPFC)  
 全米熱帯まぐろ類委員会 (IATTC)  
 インド洋まぐろ類委員会 (IOTC)

## 最近一年間の動き

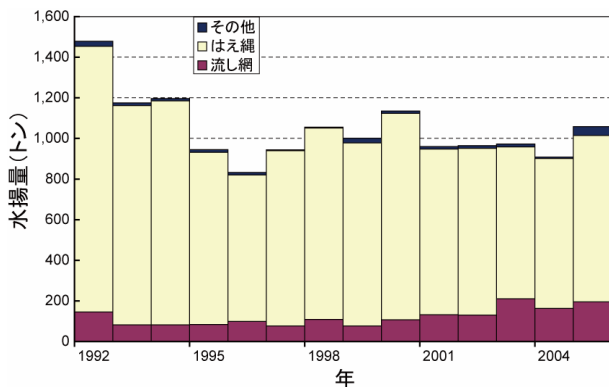
大西洋の本種資源についての ICCAT のレビューでは、北大西洋では MSY 水準を下回る懸念が依然として残るが、CPUE は近年増加傾向にあるとされた。2007 年にヨシキリザメと共に資源解析のためのデータ準備会合が開かれる予定となった。

## 生物学的特性

- 寿命: 18 歳以上
- 成熟開始年齢: 雄 5~6 歳、雌 10 歳以上
- 繁殖期・繁殖場: 調査中
- 索餌場: 温帯・熱帯域
- 食性: 魚類、頭足類
- 捕食者: 成魚は調査中、幼魚はホホジロザメ

## 漁業の特徴

本種は全世界の熱帯から温帯の沿岸から外洋まで普通に見られる種である。まぐろはえ縄や流し網などの漁業で混獲される。肉質が良いさめ類で商品価値は高く、遠洋はえ縄漁船も投棄せずに持ち帰る場合が多い。我が国では宮城県気仙沼港を中心に水揚げし、肉、鰭、脊椎骨、皮を食用や工芸用にするが、肉の大部分は欧米への輸出向けと考えられる。

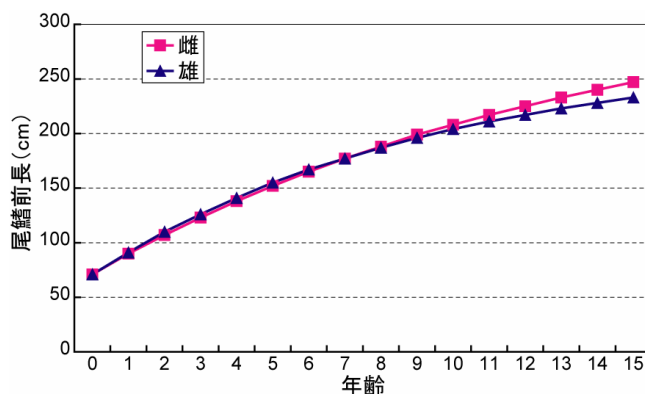


日本の主要漁港へのアオザメ水揚げ量

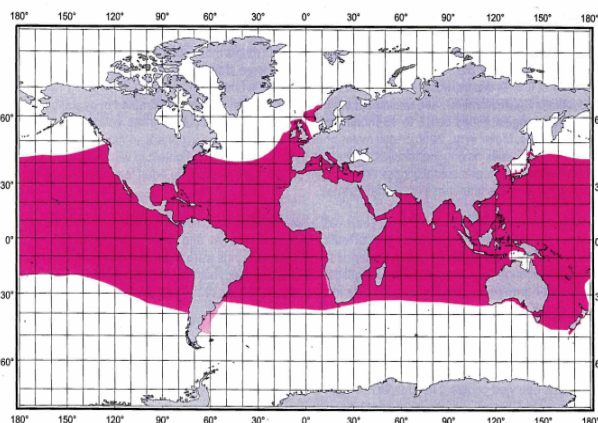


## 利用・用途

肉はソテーやみそ漬け、鰭はフカヒレ、脊椎骨は医薬・食品原料、皮は革製品



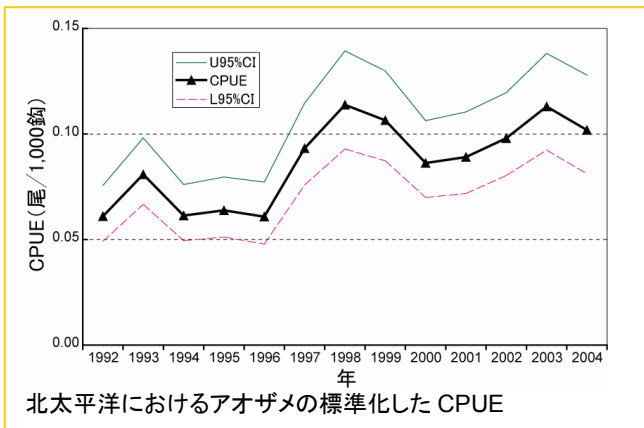
北太平洋におけるアオザメの成長曲線 (仙波 2003)



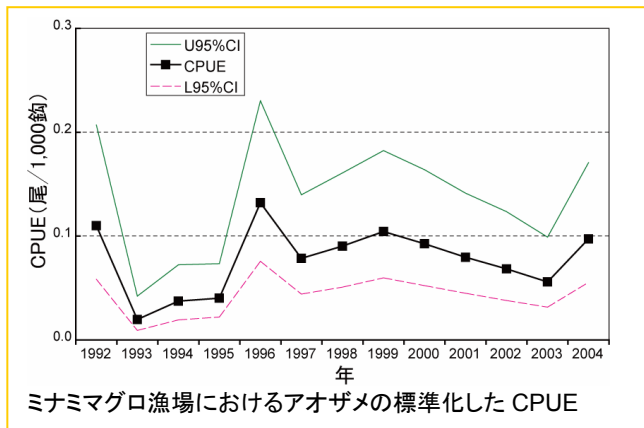
アオザメの分布 (Compagno 2001)

## 漁獲の動向

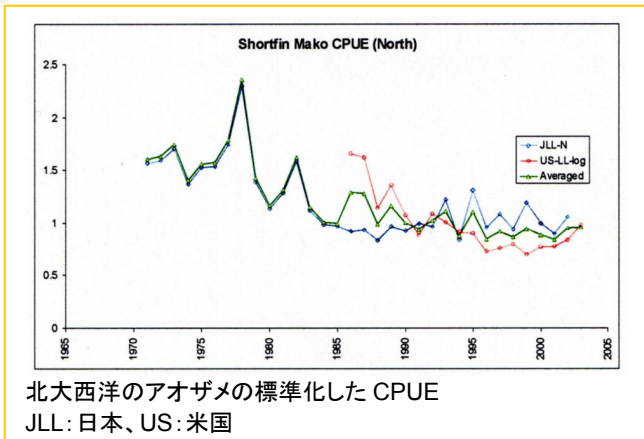
我が国の主要漁港へのさめ類の漁法別・種別水揚げ量の調査では、1992~2005 年の本種の日本の漁港への水揚げ量は 800~1,500 トンで、その内はえ縄漁業による水揚げ量が 700~1,300 トンと大部分を占める。この期間では特に目立った増減傾向は無く、さめ類の合計値に占める割合は 4~8%であった。



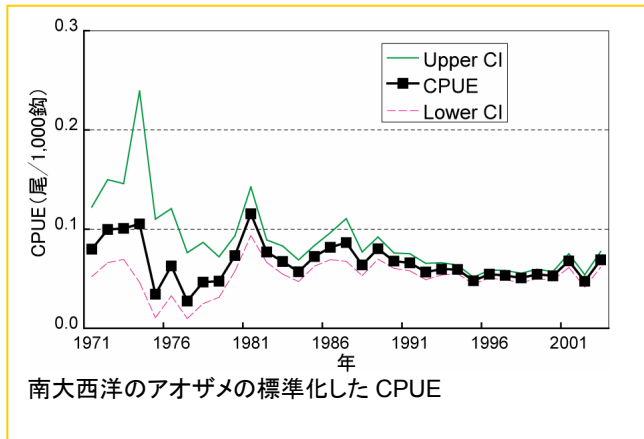
北太平洋におけるアオザメの標準化した CPUE



ミナミマグロ漁場におけるアオザメの標準化した CPUE



北大西洋のアオザメの標準化した CPUE  
JLL: 日本、US: 米国



南大西洋のアオザメの標準化した CPUE

**資源状態**

1992 年以降、日本の漁港への水揚量と、北太平洋・ミナミマグロ漁場での標準化した CPUE に顕著な増減傾向は認められず、この 10 年間余りで両海域の本種資源は安定的に推移していたものと推定された。一方、大西洋の長期的な傾向では、1971～2003 年に CPUE の減少傾向が認められ、資源の動向に注意を要する。

**管理方策**

1971～2003 年の長期間で見ると、大西洋では CPUE の減少傾向が認められ、資源の動向に注意を要する。今後、保護・管理に対する特別な勧告が必要となる可能性もある。しかし、資源評価に必要な、種別漁獲量の統計資料がないのが最大の問題である。今後は資料収集方法の改善も含めて検討していく必要がある。

**資源評価まとめ**

- 資源評価は CPUE の経年変化を一般化線形法 (GLM) で標準化して求めた
- 一部で資源減少傾向

**資源管理方策まとめ**

- 今後、保護・管理に対する特別な勧告が必要となる可能性がある
- 資源状態は観察の継続が必要

**アオザメの資源の現況 (要約表)**

	北太平洋	北大西洋	南大西洋	インド洋
資源水準	調査中	調査中	調査中	調査中
資源動向	横ばい	減少	減少	横ばい
世界の漁獲量	調査中	調査中	調査中	調査中
我が国の漁獲量 (最近 5 年)	910～1,060トン (水揚げ量) 平均:973トン	調査中	調査中	調査中